真実の言は
真実の心から
のみ生れる
—川本—

むぎ

NO.1960.2.25
10
連絡先
松山市持田町
教育会館内
川又美子

［学習の経過報告］

第五章　帝国主義の完成

第一節　日露戦争

担当者　山下満政
後藤輝磨

日清戦争により日本の産業革命が一応完成されてその事が長い間の鎖国における強固な幕藩体制に基づく後進性という封建的土地所有制度の国内的条件、及び列強帝国主義に対抗しなければならないという国際的条件に強制されて半封建的社会機構の上に軍事的資本主義国家として展開していくという事だと思います。

ロシヤは日清戦争後鉄道鉱山の利権を得旅順・大連の租借権を得たが更に朝鮮へも勢力を得ようとして日本と衝突した。日本の資本主義も政府保護下の官営軍事工業と政商資本を先頭にして急速に確立した。しかも半封建的土地所有に基づく国内市場のせまさ、資本主義の侵略的性格などからはやくも植民地市場の獲得を必要としていた。日本にとってロシヤの満州支配と朝鮮への脅威の増大とは見逃すことの出来ないものであり日ロシヤとの軍事的対立を必至とした。

英国もロシヤが中央アジアへ進出するのを恐れていたので近代国家と認められる日本と同盟を結んだ。この事は日本の支配層の対露開戦への決意を固めさせいつもの日本の手口で戦宣を布告した。しかし開戦前から戦争中にかけて内村鑑三、堺利彦、幸徳秋水等はそれぐの立場から反戦平和を熱心に主張し続けた事は無視出来ない。

時同じくして一九〇五年一月ロシヤではツアーリの専制支配に耐えられなくなった半農奴的な生活の労働者達はレーニンの下に組織を作り結集し、それはツアーリズム反対のゼネストとして現われ全国的反乱が起った。それはツアーリの軍隊にも及んで日本の勝戦として終った。そして日本の帝国主義完成へと又ファッシズムへと進展するのであろう。これが大要だったと思います。

帝国主義の五ツの条件（参考）

(1) 資本主義が当初の自由競争の本来的特徴を去り生産及び資本集中により独占化する。

(2) 銀行資本と産業資本との結合により金融資本が成立しその寡頭支配が全産業に及ぶ。

(3) 資本の海外輸出が行われる。

(4) 国際的独占資本の集団が形成され世界分割が目標とされる。

(5) 然るに資本主義諸列強により世界は分割されており再分割のための戦争の危機が絶えず迫っている。

篠崎、川本両先生の後を受けてチューターを宣言したものの……今年二回目の研究会一月十八日の決定事項つまりチューターは気楽に司会程度という事を忠実に守り過ぎて、何にも調べないでいつもぶっつけ本番で済みませんでした。それに短期向しか出来なかった事を併せてお詫びします。

与謝野晶子の「君死に給ふことなかれ」について

大山初子

テキストの五章「帝国主義の形成」の一節「日露戦争」の項のなかに「反戦運動」と題して一九〇三年（明治三六年）春ごろ日露戦争は必至とされ、新聞・雑誌はいっせいに開戦論をあおりたて、ひとたび開戦となるや、一九〇五年（明治三八年）一月には早くも難攻不落とうたわれた旅順要塞をおとしいれ、全軍破竹のいきおいで戦争を日本に有利にみちびいたが、内地の国民の間には増税につぐ増税と物価騰貴による生活の窮乏化が深刻となり、政府・支配階級のあおりたてるにせ愛国主義の熱狂にもかゝわらず、反戦・厭戦の気分がひろまったとある。

そして詩人与謝野晶子は旅順攻撃軍のなかにいる弟によせた詩「君死に給ふことなかれ」で「旅順の城はほろびともほろびずとても何事ぞ……」とうたい、はげしく戦争に反対したと書かれてある。

去る一月二五日の学習日にこのことがたまたま話題となったとき、篠崎先生はこういわれた。

「当時、社会主義者の幸徳秋水がこの詩の主張しているのと同じようなことを文章に書いている。彼の主催する『平民社』に晶子も出入りしていたから、何かの機会にそれをみてこの詩をつくったとも考えられるふしがある。もっとも彼のもつ思想を彼女もまた理解し共鳴した上でのことであろうが……。つまり秋水の社会主義的反戦思想の影響を晶子もうけたのではなかろうか……」と。

これに同調して私も「この詩のなかには、帝国主義戦争の最高指揮者たる天皇に対しての痛烈な皮肉が感じとられる。当時の社会情勢にあってよくこれだけ大膽にうたいあげたものだと思う。それもしっかりした反戦思想の裏ずけがあったればこそ……」と讃美した。

森田孝子さんも同様の発言をされた。

ところがこれに対し渡部富美子さんは大意次のようなことを主張された。

「晶子に社会主義的反戦思想があったとは思えない。この詩はあくまで旅順攻撃軍の女かにいる弟の身を案じて個人的感情でつくったものだと思う。大みこころの深ければ云々も素直にそのように思ったのに違いない。彼女は単に情熱の歌人でこの外には『春短かしな、なんの不滅の命ぞと力ある乳を手ににぎらせぬ』などのような歌しかつくっていない」と。

そしてその場はそれですんだが、私はこの問題に非常に興味を持ち、晶子が果して社会主義思想に目ざめていたのか、それも幸徳秋水や管野須賀子ほど斗士的ではないにせよ、ある程度までその思想の信奉者であったか、それともいわゆる古い詩の概念を打破して、喜怒哀楽の人間の感情を率直にうたいあげる情熱の詩人としてのみの彼女であったか調べてみる気になった。

そこで心あたりを探してみたが適当な文献がみつからず、佐藤春夫の書いた小説「晶子曼陀羅」一冊しか手にいれることができなかった。もとより小説であってみればあまり史実に正確とはいえないであろうが、以下その関係個所をまとめてみる。

晶子は風聞によって、第四師団の八連隊に召されている弟の籌三郎が二百三高地の攻撃軍中にあって、決死隊に志願するのではないかという憂慮で日夜気が気ではなかった。晶子の兄秀太郎は、帝国大学工学部の教授となって東京に住んだから、末弟の籌三郎が堺市に古くから伝わる菓子商の家業をつぎ、妻せいを娶ってまだ十月にもならないうちに、非常召集に応じ戦の庭にいた。

晶子は以前からこの弟とは気があって、格別の愛情を

そそいでいたが、その前年も父が歿したとき、かけつけた晶子を兄秀太郎は、父や兄の心にそむいて妻子ある鉄幹に走った女に、父の位牌を拜む資格はないと頑として許さないのを、こっそりと取計らって拜ませてくれた、心のやさしい弟である。

父亡き後は母の杖、駿河屋の家には柱とも頼む弟である。家門の名誉のために死なせてよい子か、夫か、弟か、他家は知らず、わが家の篤三郎は何でむざ〳〵死なせてなるものか、集団人殺し競争の戦なぞに……。

胸にあまる思いを詩筆にたくし「あゝ弟よ君を泣く」と書き出すやいなや、真情のほとばしるところ、或いは老いた母の心となり、或いは若い妻の心となって、思いつめた姉の女心がむき出しに、日常の会話の如くすらすらと出来上ってしまった。

詩人の天稟に従い、おのれの真ごころを流露せしめるに何のはばかるところがあろうぞとうたいあげたのだ。そして明治三七年九月号の「明星」に「君死に給ふことなかれ」と題し（旅順包囲軍中にある弟を歎きて）と添書きして発表した。

晶子のこの詩に対し、当時雑誌「太陽」の文芸記者をしていた大町桂月はすぐさま誌上に「國家観念をないがしろにしたる危険なる思想の発現なり」といって特に第三節の

君死にたまふことなかれ
すめらみことは戦ひに
おほみずからは出でませぬ
かたみに人の血を流し
獣の道に死ぬよとは
死ぬるを人のほまれとは
大みこころの深ければ
もとよりいかで思されむ

とあるのを「天皇自らは危き戦場には臨み給わずして、宮中に安座しながら、死ぬるが名誉なりとおだてて、人の子を駆り人の血を流さしめ獣の道に陥らしめ給ふ無慈悲なる御心根かな」と解して憤った。

晶子は果してそんなに天皇に毒づいたか、いかに晶子といえども、あの時代に天皇に毒づくだけの勇気と、度胸はなかったから、桂月のこの難詰

にあうと迷惑し、面喰い、晶子は桂月が自らも久しく詩作を試みてその道の大先輩でありながら、詩を読み味わう力の乏しく浅いのを慨さわらい、自分は民の声を率直にうたうのが詩人の真使命と信じて、真ごころを歌っておいたばかり、出陣の別れに人々が萬才と叫ぶのと同じ心を弟への手紙の片端に書きつけた程のことと発表した。

これにうなずく人もあるなかで、それでも桂月は再び誌上に「日本國民として許すべからず悪口なり、毒舌なり、不敬なり、危険なり」と断じ晶子を「乱臣なり、賊子なり、國家の刑罰を加ふべき罪人なり」と極言した。彼は晶子をも非戦論者の一派とみなしたのである。

桂月の非難があまりに烈しいため、夫の鉄幹は桂月と対決した。桂月は晶子が國を怨み、君を怨むのは危険な思想だといゝ、その怨み方が普通でなく感情が露骨だと指摘した。鉄幹は桂月が晶子の詩を故意に意地悪く曲解している、原作には「死ぬるが名誉などとおだてて……残虐無慈悲な御心根などとはどこにもない」と正しい解釈を述べると、桂月は「そう読めないでもないがそれではあまりに平凡だろう、それに平時ならばともかく挙國一致の今日、宣戦の詔勅に対しても畏れ多い」と依然主張して止まなかった。

後年大いに重宝して使われた「危険思想」の語は、起源を晶子のこの詩を評した桂月から発したものであった。

晶子の詩に一大痛棒を加えたつもりの桂月の批評は、少しも晶子の詩人としての名声を傷つけぬばかりか、精々これを宣伝するに終り、この論争のおかげで「君死に給ふことなかれ」は一代の名詩のようにもてはやされた。と同時に桂月自身はも早時代おくれの旧思想家として印象されるに至ったのは皮肉であったが、これもみな時勢というものであろう。

やがて明治三八年十月戦争は終った。戦後文運は大いに栄え、中でも社会主義と自然主義に根ざした散文の勃興は、当然に詩歌をそれまでの文壇の中心地帯から追放し、やがて鉄幹・晶子の苦難時代が始まった。

以上であるが、私は実のところ大へん失望しながらこの一文を書いた。これがもし事実であるならば、テキストの書き方も問題であるし、私自身としてもこれまでに抱いていた晶子にたいする憧憬と讃美のベールがはがれることになるのだから……。

小説はこの後、晶子が夫鉄幹と女門下生の間を邪推嫉妬して、大へんな夫婦間の葛藤があったことが述べられてあり、この点彼女もまた凡婦であったかと更に失望を重ねた。けれど前述の篠崎先生のお言葉もあり、やはり社会主義思想に目ざめていた晶子として、この「君死に

絵ふ「ことなかれ」と共に記憶しておきたい気が私にはある。

―一九六〇・二・五―

詩

私の前にある鍋と お釜と燃ゆる火と

それはながい間
私たち女のまえに
いつも置かれてあったもの

自分の力にかなう
ほどよい大きさの鍋や
お米がぶつぶつとふくらんで
光り出すに都合のいい釜や
却初からうけつがれた火のほてりの前には
母や、祖母や、またその母たちがいつもいた

その人たちは
どれほどの愛や誠実の分量を
これらの器物にそゝぎ入れたことだろう
あるときはそれが赤いにんじんだったり
くろい昆布だったり
たゝきつぶされた魚だったり

台所では
いつも正確に朝昼晩への用意がなされ
用意のまえにはいつも幾たりかの
あたたかい膝や手が並んでいた。

ああその並ぶべきいくたりかの人がなくて
どうして女がいそいそと炊事など
繰返せたろう？
それはたゆみないいつくしみ
無意識なまでに日常化した奉仕の姿

炊事が希わしくも分けられた
女の役目であったのは
不幸なこととは思われない
そのために知識や、世間での地位が
たちおくれたとしても
おそくはない

私達の前にあるものは
鍋とお釜と、もゆる火と

それらなつかしい器物の前で
お芋や、肉を料理するように
深い思いをこめて
政治や経済や歴史も勉強しよう

それはおごりや栄達のためでなく
全部が
人間のために供せられるように
全部が愛情の対象あって励むように

「或る詩集より」

わたしの好きな言葉

近代の道徳は温順でも従順でも
忍耐でも無い。
抵抗である！
抵抗である!!

―藤田謙十郎―

―れんさい―

自己紹介

山とスキーと結婚と

増岡栄一

先日、祖母が九十九才の高令でなくなりました。
文久二年生れですから私達が習っている近代史の時代を直接ずっと見聞して来たわけです。そう思うと明治維新とか、日露戦争とかいうものも身近なものに感じます。その葬儀の時集った祖母の子供（僕にとっては叔父や叔母）で七十才以上の人が五人いました。どうも私の家は長命の家のようです。

昭和二年十二月十二日生れの私も、祖母にあやかれば来し方より行き先の方が二倍あると心強く思います。より良き日本の社会をこの目で見、この身体で体験することが出来るだろうと楽しみにしています。そしてその方向へ一歩でも進むよう、現在の時点に於て努力したいと思っています。

現在、私の家は父母と妹二人。父母は家に居り、上の妹は洋裁店に勤め、下の妹は高校二年です。私は新宮小学校―松山中学―徳島工業機械科を経て、現在は数

員をしています。専門学校当時は航空技術者になろうと思っていましたが、二年生の時敗戦を迎え、この目標はなくなりました。敗戦後で工業は壊滅し、技術者としての職のないまゝに教員となり、しばらくは技術者への復帰が出来る時がくればと思っていましたが、現在では今の職業で社会の進歩のために少しでも盡そうと思っています。

学生時代は戦争中の事とて、日本は必ず勝つという宣伝を敗戦の日まで信じていました。敗戦後二、三年は何の考えもなしに過ごしました。その中に変転きわまりない社会をみて、何かこれを見て行く基礎をつかみたいと思うようになり、当時、愛大教授であった小川太郎先生のお宅で開かれていた秋沢修二著「西洋哲学史」の読書会に参加しました。そして自分でも高橋庄司著「人民の哲学」といったような本を読むようになり、正しいものの見方、考え方についての目が少しづつ開かれて行った様に思います。その後も行きつ戻りつしながらも、自分の進むべき方向はわずかづつではありますがはっきりと心の中に刻みこまれてゆきました。

こうした中での一つの悩みは、八年前の父の定年退職により、当時祖父母を入れて七人であった家計の大部分を私が負担しなければならなくなった事からです。

理論的にはかく行動すべきであると判っていても、一人身でない私は、家族全体の生活を考えれば、思いきった行動が出来ない事が沢山ありました。私の中において理論と実践に一致しない点が往往あるという事は大きな悩みでした。家族の生計は考えなくてすみ、自分一人の事だけ考えたらいいのだったらどんなにかいいのにと、つくづく考えた事がありました。現在は、祖父母も天寿を全うし、妹も一人は就職して、家計の事情は大分やり易くなりましたが、家計をみなければならない事には違いないので、やはりこの悩みは引続いています。

しかし私としては一応「現在の環境の中で最善を盡すそれより外仕方ないのだ。」と思っていますが、サークルの皆さんのお考えはいかゞでしょうか。

私の現在の職場はこの様な問題を話しあえるような雰囲気ではないので、サークルの皆さんなら、ザックバランに言っていただけるのではないかと思う次第です。こゝ四、五年時々「君ももうまあ結婚したらどうだい」と人から言われて来ましたが、「まあ、そう急いだことも ないからね」と言葉を濁して来ました。家計の事を考えると自分の結婚のことはあまり積極的に考える余裕がなかったのです。だから現在白紙の状態です。

昨今、経済的な見通しも立つようになったので、自分

自身の結婚についても考えようと思っています。

私の趣味の第一は山とスキーです。どれ位好きかといっても尺度がむつかしいですが、こゝ四、五年間大体平均して年に三十日位は山かスキーに行っています。

或人に言わすと「増岡君は山の話をしている時が一番楽しそうだ」と。それに関連して写真を写すこと、歌を唱うことも好きです。しかし之等は全部山でという註釈付です。いつかはヒマラヤの七〇〇〇米の峰に立ちたいと夢を抱いています。その時にはどうか御支援の程を。

甘党、辛党という事になると、両方共少々という所で酒とお菓子と両方並んでいたらお菓子の方へ手が出るというのが偽わらぬ所です。その他食べる方なら何でも賛成。しかし一つだけ苦手があります。それは「うどん」今、食べに行きたいなあと思っているのは、洋食の定食。てんぷら料理ですが一人で行くのはあじけないし、今迄の自己紹介によるとうまいものの好きな人はこのサークルに大勢おられるようですが、割勘で一緒に食べに行こうという人はありませんか。

自己紹介

『三十歳をバリガえて』

合田鈴子

「思う存分お喋りが出来て思う存分本が読めて思う存分眠れて思う存分ボーと出来る時間が欲しいなー。」といつも思って居るのにその中のどれ一つ満されない毎日を過して居ります。そして大きくは政治の事から小さくは八百屋のお大根のよしあしに迄しじゅう喜んだりフンガイしたり悲しんだりしながらも何となく楽しく生きている至極主婦らしくない主婦であり・兼デパートの店員です。篠崎先生はよく歴史を見るのに時代を区分して考えると良いとおっしゃいますが、私の精神史で、と名付けると大げさですが、心の遍歴を見るのにもやはり区分すべき所がある様に思われます。

その第一番目の区切りは幼年期を終える時期。それはどうやらものを考えはじめた女学校の三年十四才か十五才位頃からでしょうか。大平洋戦争もたけなわの頃疎開と云う名で松山へ移り住み、今の南高校の前身の松山高女へ転校して間もなく昭和十九年九月八日学徒動員で今治へ当時B29を射墜する弾丸だと云う気球弾を作りに行

きました。お国の為に一生懸命働らこうと随分張切って工場へ行ったのですが、ふっとこんな疑問が湧いてくるのです。「私達が一生懸命作っているのは人を殺す弾丸ではないか、どうして人と人が殺し合わねばならないのだろう。高い所から見ている神様はこんな私達人間をさぞ悲しい気持で見ておられるのではないかしら」と。そして工場の監督の人が悪魔の化身の様に思えて来たりしました。でもこんな事を誰に話せるものではなくこっそり考えては日記に書きその日記を毎日救急袋に入れて持ち歩いていたものです。当時工場では私達の私信迄みんなケンエツがあって、母へ書いた先生の批判（悪口）が見つかり、その若い女の先生にひどく叱られて夜一人で泣いた事もあり、その後もそれに似た事で注意されたりしてとても素直な気持で手紙が書けなくなったものでした。だからこんなキケン な日記がみつかろうものなら大変なことになっていたでしょう。けれども又、こんな事を考えている私は非国民なのだろうかと悲しくなって一人で苦しんだりもしました。工場での私の仕事は検査だったのですが、時々係長がオシャカの弾丸が溜るとハトロン紙より厚手の紙をゲージにはさんでもう一度検査して合格にする様に命じ、少々のスキのものは全部合格にするのががまん出来ない位腹が立ったものでした。

この事は近代史で学んだ日清戦争中、陸軍御用商人大倉喜八郎が軍糧の「かんづめ」に石をまぜて不正の巨利をむさぼった事と同じ事だったと思うのです。

この工場で級友二人空襲で失い、その後母を病でとくし戦後の混乱のまだおさまらぬ二十三年に卒業し、二日目から三越へ出勤しました。そしてここでも一生懸命働こうと胸をはずませて毎日通っていましたが、立派な三越人イコール人間らしい人間とはならない事に気づきはじめた一年目頃、組合の婦人部長に推されていました。

およそ組合の「いろは」も労働運動の何かもぜんぜん知らないで平気で居り、それでも別に支障もない組合でもあったのです。

その組合が昭和二十六年十二月、デパート史上初めてのストライキをやったのですが忽ち分裂が起りその為にいやでも真剣に組合の問題について考えねばならなくなったのです。この辺りから私の精神史のヤニ番目の区切りになります。

会社は必死になって組合を弾圧し組合員はそれにたえきれずどんどんヤニ組合の方へ流れて行き松山でも殆どヤニ的空気になっていましたが、私は私なりに真剣に考えてヤー組合に残る事が正しいと思い、それを主張しつづけた為に執行部の中で孤立してしまいました。

当時松山では百余名の中第一に残ったのは男三人女九人の十二名でした。その十二名に対する会社及び第二組合の圧迫は実にひどくて私が店を去る時の理由はきっとクビと云う状態だろうと思えた程です。お互いにはげまし合い勇気づけてはいましたが、随分心細く不安な毎日でした。今思うと本当に恥しくなるのですが私自身「義を見てせざるは勇無き なり」とか、その頃読んだ中央公論だったと思うのですが「男のしてはならない事」と題して何条かあり他は全部忘れましたが、その中に「男は組合を分裂させてはならない。」とあったのです。そんなものに支えられた随分頼りないものだったのです。それがとても私には不安でもっと私達のしてる行動が本当に正しい事だと裏付けて呉れる理論みたいなものが知りたく、もし勉強してみて私達のしてる事が間違っているならばその時こそ勇気を右にしてあやまらねばならぬとも思いとに角それ以来夢中で本を読みました。

夢中で読んだと云っても、当時の私の疑問や悩みに対して解決を与えて呉れる本はこれですと教えて呉れる人もなくて、本屋で手当り次第に買って来ては読んではみるが、むつかしくて仲々理解出来ずなさけないやら悲しいやらよく涙がこぼれましたが、店での口惜しい仕打ちを思い出すと又怒りがこみあげたものでした。とに角必死で勉強しなければならない所え追い込まれていたわけですから何とかしなければと商大の夜間部へ行ったり、その後知り合った合田にも教えられしてどうやら何かが判りはじめたのです。その一年余りの間の私はまるで暗中モサクと云う姿であったのでしょうか。何かが判りはじめたその頃、後で読んだ宮本百合子の「二つの庭」の中で百合子の史的唯物論の読後感を「今迄目の前に立ちこめていた深い霧がはれてむこうの森や林や野原や小川がだん〳〵はっきり見えて来る様だ」と書いていましたが全くそん な気がしたものでした。

私の精神史に大きな区切りをつけさせ、私の目を開かせて呉れたその争議（その後当時の中央執行部に対する解雇反対を法廷であらそっていましたが）が今年の一月依願退職と云う形で和解と云う事で一応終結をみたのです。

殆ど十年に近い斗いの間に第一組合員は六〇〇〇名中六十八名、松山では五名になってしまいました。

此の間大会があって東京に行った時本店の女の人が給料で差をつけられ賞与で差をつけられて十年の合計で百万円に近い損害だと笑いながら云ってましたが、本当に随分いろんな苦しい事や辛いことがありましたが、私達五名ともそれをちっとも後悔しないでますます、しっかりやらなければならないと明るい気持でいられる様になっ

ことが十年前の斗いの成果とでもいえるのでしょうかこう云うと随分大人になったみたいですが、私ももう三十才だと云うのに未だに人との挨拶やつき合いに大人らしく振舞えないのでとても悲観して居ります。

一九六〇年二月二一日

温故知新

渡部冨美子

〝古きを温のて新しきを知る〟何と素晴らしく魅力のある言葉でしょう。私がかって女学生時代から好きであったこの言葉を、床の上の額に仰ぎ見ながら、過去三年近くわずか一週一回ではありましたけれど、「女性史」から「近代史」へと私なりに一生懸命勉強しつゞけて来たことに相通じるものがあることを、私自身私の良心に対して誇らしく思いしみゞと味っております。私が御世話している婦人公論の一月例会の案内状に私はこう書いて多くの読者に呼びかけました。

「私達は過去と未来をつなぐ大切な〟かけ橋〟正しく美しい女性の歴史を次の時代に遺す為に私達が現在おかれているこの社会生活の中でどの様な〟生き方〟をすることが一番辛であり正しいことであるかを〟知る〟ことが最も大切ではないでしょうか……」と。

現在を正しく生きているかどうかと云うことを的確に自分自身で把握することが出来たらどんなにか力強いことでありましょう。而しそれは絶対不可能であり、その結論は未来の人達が歴史の事実として厳然と審判してくれるまで待たなければならないと思います。

今私はこの〟生き方〟が一番正しいと信じて生きられる心の支えを求めて過去の歴史を考えています。而し歴史とても、現実にこの複雑な資本主義社会の中で今私が当面している諸問題に対して百%明快な答を出してくれないのです。そこで私は流れゆく〟時〟に抗することが出来ないで相変らず〟なやみ〟乍ら、それでも生きてゆくことを続けなければならない、人間としてより豊かにより美しくそして正しく……。そして今日一日〟生きた〟この事実が、明日のよりよく〟生きる〟ことへの最良の〟糧〟となる為に今夜も静かに一人で考えるのです。

人間の認識の根源は社会的実践であり、社会的実践から感性的認識の段階を経て理性的認識の段階へ……。

『実践、認識、再実践、再認識』というこの形式が循環往復して無限にくりかえされていき、循環ごとに実践と認識の内容が常に一段高い段階に進んでいく。そして人間

が外界の事物と法則を認識するその一歩一歩はすべての客観的有絶対的真理の意義をもつ。しかし外界の事物は一度に完全に認識しつくされるものでなく、同時に外界の事物それ自体も、絶えず×発展×変化しているので、人々が客観的真理を認識する長い途上の一歩一歩はまた条件つきであり、相対的なものでしかあり得ない」と毛沢東は彼の「実践論」の中で申しております。

私がこを読んだ時、パット頭をかすめたものは古典的へ〝いな〟温故知新〟この言葉でした。しばらくじっと考え究極的にはこの両者の中に潜む一致点を私なりに発見して非常に嬉しく思ったものでした。

振り返ってみますと、花をつんで歌い、月を眺めて涙する多感な若の女学生時代を、第二次世界大戦中に過ごし、聖戦を勝ち抜く為に〟と云って欺瞞せられ、すべての感情生活を犠牲に肉体的重労働の奴隷的生活を強いられ、又夢多き青春時代は動物として〟食う〟為にのみ生きている様な敗戦による社会の混乱期に過した私、更には現代の資本主義社会の中で最も独占的産業である電気事業の中で〟電産〟華やかなりし、昭和二十二、二十三二十四年と組合に専従しその後会社業務に復帰した十余年の間で二十七年春の電産のストライキに対しての内外の冷酷な批判は組合の分裂を招き、二十八年の電労の誕生となって胸を刺される様な苦渋を味わった社会生活、それに並行した家庭生活では最も封建的な農村の中産階級の〟家〟で長女と云う重荷を背負って弟妹五人と共にささやかな、精一杯の抵抗をつゞけて生きて来ました。

太陽によって象徴せられる希望の朝が明けた時、私は一人でも多くの大衆と共に常に百歩の前進を試みようとします。そうして思索の夕、雲にかゝる月を仰いで「アア私は〟孤独な人〟になりたい」とつぶやきます。何故なら一歩二歩私は一人で停滞し〟沈思黙考〟今日一日の行動を明日の百歩の前進の為に意義づけたいと願うから……。そうして今年も又この女性史サークルのメンバーとして限りなき尊敬の念をいだく篠崎先生を中心にして多くの同志の皆さんと御一緒に更に深く、広く歴史が証明している諸事実を勉強しつゞけられることに〟生きている〟ことの喜びをかみしめ乍ら、最善の努力をつゞけてゆこうと思っております。

次の歌は私の最近作、非常につたないものですけれど、私の〟生き方〟が少しでも表現されているのではないかと思い、お恥しいこととは思い乍ら御披露させて頂きます。

立春（ハル）うらら　麦踏む老夫老婦らの
語らいを見つつ　一人旅行く。

渚近く煮干乾したる漁婦の背の
いたくあたたかに　立春の日光よ。

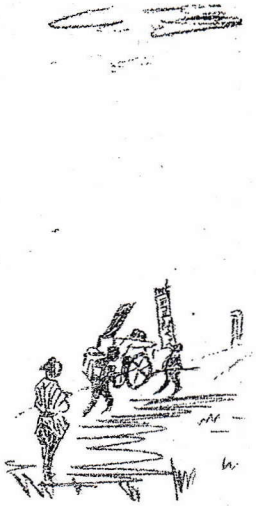
こたつ囲み　早まどろみぬ母の手の
節くれしに想う　古き捉を。

早春

福寿草の黄色いふくらみに
こゝだけは愛らしく陽があたっている
桃、南　、雪柳、どれも冬の姿だが
それでも目に見えないかそけさで
ゆっくり、ゆっくり春の支度をする
路がうすみどりのとうをちょっぴり出すと
それはもう春のさきがけだ
黒い土の下から大空の雲のきれ間から
春はしのび足にやってくる
やがて私の庭に大手を振って来る日も近い。

新制作座「馬五郎一座てんまつ記」

×××× 感想のページ



去る二月十五日午後六時から東雲高校講堂に於て、松山演観協主催の、新制作座「馬五郎一座てんまつ記」四幕九場が上演されました。この日はサークルの学習日にあたっておりましたが、待望久しかった同劇団の公演を観賞することも、形のかわった学習の一つと確認し合って特にお休みとし、殆ど全員の人が参加しましたので、本号にその感想文をみんなで書くことに致しました。

「馬五郎一座を見て」

川本　健二

感想を書くというこの宿題はむつかしそう友気がしたので、ひそかに出かけていたと二

ろがメンバーの一人とパッタリ視線が会ってしまった。覚悟をきめて場合を見廻わせば、いるわいるわ……といった次第で止むなく浮んできたまゝに。

先ず、とにかく面白い。機会があればもう一度、今度はもっと前の方セリフのよく聞えるところで見たいと思う。特に一座の少し抜け気味の男――トク左役割であることを差引いても出演者の中では一番うまいと思った――をめぐる断片的な所作の中に、皮肉と哀愁を含んだ面白さがあった。

仙生氏によれば「大したもの」だそうだが、私にはそれ程とは思えなかった。特に氏が強調している「新制作座と客席との交流」がむしろ気まづく――始めの挨拶のなかから既に――思わせる。それは「観客を意識し過ぎる」こと、笑いや共感を観客に強制し或は逆に媚びているのではないかということ。築地の流れをくむのが最良というのではないが、そうして新制作座の意図するところには無条件に賛成であるにしても、「大衆性」をこのような方形でおし進めるとすれば、劇と大衆とを乖離することの危険を招来するのではなかろうか。こんなことから「学問のあり方」、その目的と過程との関連についても深く考え反省させられることにもなった。

この劇のもとになっている「戯曲はどうなのだろうか。私はこの方が劇よりももっと面白いだろうと思う。演出の失敗があるようにも思うし、俳優の芸の方も「うまい」とはお世辞にも云えないような気がする。但し無理な日程と劇場の不備ということもあろう。

文化国家を宣言したし、松山も文化都市と称しているのに大衆のための芸術に与えられるべき保護と奨励とがここでもゴマかされている。

その他明治十何年かの未松謙澄(?)の「演劇改良運動」以後追放された筈――と思っていた――の座附作者という言葉が、今日而も新劇で、尚使われていることにびっくりもした。尤も彼等は自らゝお芝居」と云ってはいるが。

Tさんへ……

白石昭子

前略

寒冷えのする日でしたので靴下を二枚も用意して見に行きましたの。音楽にしろお芝居にしろ、いろ〳〵理くつをつけて鑑賞するのはあまり得意ではありませんので、折角見に行くように、お便り貰きながら〃感想〃をという言葉にひっかかってしまいました。でもたのしい一時

を過す事が出来てとてもうれしく思っています。

私の見た範囲でのお芝居に二つの型があるように思います。勿論作品とか演出にも原因があるかとは思いますが。その一つは作品の中で、主役になるグループと、その他大勢の人達によって構成されるもの。

もう一つは、誰が主役というのでもなく、全員でもり上げているといった感じのもの、この二つにわけてみたいと思います。

そこで馬五郎一座は、さしづめ後の部類の代表者とでもいえましょうか。馬五郎でもなく、おけいさんでもなく、文化部長でもなく、全員によってかもし出されるものは、あの力強さ、ひべきとなって迫って来ます。あのお芝居の底に流れる場の違いこそあれ、お互に仲間であることの意識、そして前進への意欲、それらが喜劇として、笑いを通しながら展開されていくところになお一層の親近感を味う事が出来たように思います。

ともすると排他的になりやすい私は、この馬五郎一座をみて人間性の純粋さ、又人間であることのたのしさを沙と味わいました。

客席に坐っている私が飛び込んで行っても決して不自然ではない親しさを感じます。大衆の中から出て又大衆の中に帰ることによる親しさなのでしょうか？

矛盾という言葉がありますが、そんな表現を使ってみたくさえなります。

演技の面でも瞠所に、さりげない動作ながら実にうまい表現がありました。例えば演芸大会のはじまる前の緊張した時に起る生理的現象等！。それから声が美しく、声量が豊かで生きゝしていました。

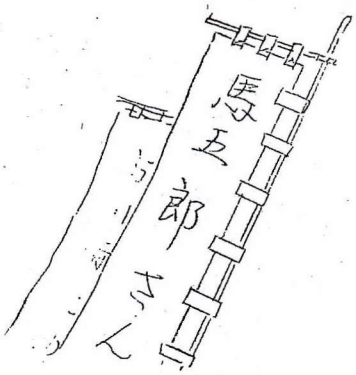
たゞ一つ、このお芝居と以前見た〝島〟を思い出して比較してみました。比較するには、多少無理な点もありますが、もう一年半位前に見たものですが、その内容、表現等目の前にあの時の情景が浮んで来るほど、心に沙みるものがありましたが、今日の馬五郎一座には、もり上った力強さはあっても深く迫ってくるものには、乏しかったのではないかと思いましたが……。

如何でしょうか？

御自愛下さいますよう

三十五年二月十六日

T さん



讃!!「新制作座」

大山初子

手拍子あわせてにぎやかななかにも、一抹の哀愁をただよわせて、八木節をおどるエピローグ「野面を渡って」の場面で、私は涙を流しながらいつか舞台につられて、小さく手拍子を打っている自分を発見しいそいであたりを見まわしたが、それは私一人だったので驚いて止めてしまった……。

それ程に私はこの新制作座「馬五郎一座てんまつ記」の舞台にひきいれられてしまっていた。大向うをうならす特別の名演技などないかわり、舞台上の熱と調和は本当にすばらしく、私の流した涙も単にお芝居を見てだけではなくて、新制作座の座員が全員一致団結し情熱の火の玉となって、日頃新劇の観賞にうえている地方のすみずみにまで積極的にトラックにのって巡演し、労働者や農民と交流を密にして、そこに日本の新しい文化、民衆による民衆のための芸術を創造しようと懸命に努力している、その姿に対しての心からの感動の涙であった。

当松山でも演観協が組織されて以来「民芸」や「俳優座」その他あまたの劇団が来演したけれど、なかでひときはすぐれて、日本のこれからの新劇の方向を身を以て具体的にさし示しているのはこの若さにあふれた新制作座だけであり、かっての地方公演を主体とした前進座が大劇場に進出して姿を消した今、この劇団のみが日本全国の至るところに明るい笑いと、人間と人間が労わり合う暖い涙と、力強い明日への希望をふりまいている。

今年で創立一〇周年を迎えたという新制作座が、ますます正しく大きく伸んで、日本の演劇活動のリーダーとなり常に大衆のなかに生きてくれるのを心から願っている。それにつけても幕あき前、或る主演者の一人が挨拶したなかで「高松や徳島では低調で残念だったが、松山の皆さんはどうか私達の舞台の反応を率直にみせて下さい」といったのが、妙に大衆を意識し過ぎているようで少し気になった。

大衆は正直だ。黙っていても芝居が面白く感動的であれば大いに湧くし、又反対につまらなければソッポを向く。それでは「馬五郎……」はどうであったろうか。この物語は数年前「浮草日記」と題して山本薩夫監督で映画にもなっており、その方も楽しく見たけれど、今度のなまの舞台の方がはるかに面白く、素朴で、一番前の席で見ていたせいか、私は完全に劇中に巻き込まれてしまい、馬五郎一座のおけいや炭坑労働者と共に笑い共に

流いてしまった。後の席からも盛んに爆笑や拍手をする音がひびいてくる。

舞台転換の幕がしまるたび、ああこれはお芝居なのだとハット気がつき、何度も後を振り返ってこう思った。今この場内を埋めつくしている千人の群衆の感動と共感のあらしが、新制作座の熱演と一体となって、こんなにもすばらしい舞台を、私達働く者の芸術をつくっているのだと……。

この何ともいえぬ清々しさ、満ちたりた幸福感は、芝居のはねた後私達の手で椅子を片づけ、座員の人としばしの両話し合いをし、明日は宇和島へ行くという馬五郎さんやおけいさんと「どうかお元気で頑張って下さい」「さようなら又きて下さい」と別れを告げて、深夜の冷たい道を急ぎながら、何時までもつづいていた。

消息欄

○　去る二月二十日から三日間、松山で約四千人の男女青年を集めて盛大に行われた第十回愛媛青研大会で、分科会の専門委員を篠崎先生も川本先生も担当されました。テーマは「恋愛・結婚・家庭」でお二人とも大いに若がえり大へん楽しかったということです。

又第一日目の「歌と踊りの夕」の幕あいを利用させてもらって、大山さんが松川事件公判準備資金カンパを訴えたところ直ちに六、三五二円が集りました。

○　来る三月八日は国際婦人デーの日です。コペンハーゲンで各国の婦人が集り、基本的権利をかちとるために、また平和を守るために団結し、あらゆる努力をつくさなければならないと声明してから五〇周年記念の日を迎え、松山でもこれを意義ずけるため当夜道後公会堂で盛大な行事を行なうことになりました。

わが〃女性史サークル〃も実行委員に川又さんをおくり積極的に協力することになりましたが、今までの学習の結果も何らかの形で壇上から発表するよう要望されております。与えられた時間は十五分、皆さんのお智慧や御意見御協力をお願いします。

○　めぐりくる陽春に先がけ来月、三月二十五日立田先生がめでたく結婚されます。新婦になる方はやはり市教組の御手洗先生で、かってこのサークルのメンバーの一人でもありました。

お二人の前途の御多幸をお祈りしましょう。

○　おめでたが出たところでもう一つ、白方先生夫妻のところでもベビー誕生の予定。出産は八月とか……。

お気の毒にも先につゞけて赤ちゃんを二人も亡くされていること故、今度こそは御無事に育ちますよう祈るや切。

○青野先生のところでは子供さんが〝ハシカ〟とのこと早く何ごともなく元気になられますようこれもお祈りしております。

新人会員を御紹介します

どうぞよろしく。

武智福子さん

武智祐治君の妹さん、なるほどよく似ていますね。

松崎善広君

エ水戸さんのボーイ・フレンドで折目正しい銀行マン。

浜野利和君

今春新田高校を卒業し、大阪へ就職の予定。

〝少年よ大志を抱け〟

編集後記

冬来りなば春遠からじ……。立春も過ぎ、空の色、雲のたゝずまい、そしてお城の山肌にも、そこはかとなき早春の息吹が感じられます。

時には気まぐれな冷たい風の日もあるけれど、東風が西風を圧しつゝあるのは誰の目にも明らかで、一日も早い本格的な春の訪れが待たれます。

そしてそ嶺は日本のぽんとクの春を待つ思いでもありますが、しかし自然の春は暦と共に毎年正確にやってきますが、人類の幸せな平和の春は私達一人一人の行動で築かねばなりません。

こゝ数年前を暗い冬の谷間とするならば、いまは光ほのかな雪どけの早春の時代でしようか……。

自然の春も、人類の平和の春ももうすぐそこまで来ています。頑張りましよう。